参考

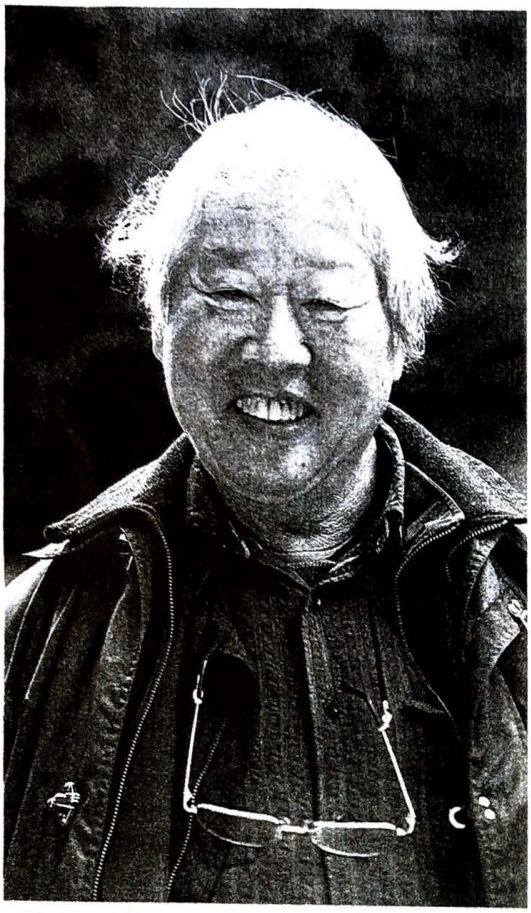
人生 贈

やりたいこと やれる社会であれ

ジャーナリスト・評論家

立花 隆（75）　15

わたしの半生



「人生を『勝ち組』『負け組』に分けるのは間違い。勝ち組の人たちを見ていると、仕事、時間に追われ、休むことなく働いている」と語った＝東京都文京区、早坂元興撮影

――第1次安倍政権時代の2007年、憲法の制定過程を洗い出す「私の護憲論」の連載が月刊「現代」（講談社）で始まりました。

第1次安倍内閣は「戦後レジーム（体制）からの脱却」を掲げ「憲法改正」に意欲をみせた。現在も考えは変わらないだろう。彼は当時「現行憲法を起草したのは憲法に素人のGHQの人たちだった。基本法である以上、成立過程にこだわらざるを得ない」と語った。これはまったくのデタラメ。彼らは法律の専門家だった。米国は終戦の2年前から日本の体制をどう変えればいいかを研究していた。

基本的人権の部分は、48年に国連総会で採択した世界人権宣言と重なる。人類が自由を獲得する長い歴史の結果を取り入れている。いまの憲法、憲法9条による戦後レジームは日本を歴史上もっとも繁栄させた基盤。戦前日本の失敗は大日本帝国憲法レジームがつくった。戦前は経済や物質的資源が軍事関係に回ることを優先した。戦後はそれを民生に投入し、経済の復興と成長につながった。

連載開始の07年に、東大大学院情報学環特任教授に就き、東大駒場祭で立花ゼミ主催の憲法集中講義を行った。世論調査で改憲に賛成する若者が多くなり、危機感を持った。憲法の価値を知らないだけでなく、憲法の知識も欠けていることを実感した。戦後体制の価値は、戦前と比較してみないと分からない。戦前がどういう体制だったのかも知らないのだ。

――憲法改正は、現在も政治上の焦点です。

戦後70年がすぎ、70年の区切りには意義があるように思う。20世紀の超大国の一つソ連では、憲法が生まれ、連邦が解体するまでが約70年。20世紀最大の失敗国家だ。一方、繁栄を築いた日本は成功国家。自由主義と民主主義と平和主義が三位一体の現行憲法を改変していいのか、そのことが問われている。

――個々人の生き方を、同時代の中で考える講義を、08年に立教大にできたシニア世代向けコースでされ、「自分史の書き方」（講談社）を出されます。

あのコースは入学資格が50歳以上。人間は不思議と、60歳をすぎるあたりで、「自分の人生は何だったのか」を考えたくなるものらしい。それを具体的につかむには自分史を書くのがいちばん。東京オリンピック、ロッキード事件があったとき、何をしていたのか、自分と時代をふり返る手がかりになる。

受講生は団塊の世代が中心だったから、父親が戦争で亡くなったり、広島で母親の胎内で被爆したりといった体験がある。彼らの自分史を読むと、日本の高度経済成長の様子が具体的にわかった。企業社会で競ってきた人もいるが、無限のエネルギーがない限り、常にトップ集団に居続けるのは不可能に近い。どこかでトップ願望を捨てて、脱線することも楽しむ人生に切り替えるべきだ。

僕は「やりたいことを、やりたいように、やる」ことが、もっとも幸せな生き方と思う。そういう生き方が保障された社会であってほしい。

（聞き手・平出義明）＝おわり

◆次回はシンガー・ソングライター、イルカさんです。